（別紙２）

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名　　工　藤　晶　人

工藤晶人氏の論文「境域の形成―フランス植民地期アルジェリアにおける学知と空間編成 1830-1914」は、他者認識または異文化認識の表現となる学知、とりわけ植民地法学の形成過程、およびその具現化としての制度的・地理的な空間形成を分析することにより、フランス植民地支配とアルジェリア現地社会との関わりを、複合的な視点から解明しようとした労作である。

本論文は三部構成をとり、まず第一部では前史となる近世アルジェリアの政治・社会構造を広域的文脈から論じたのち、征服直後のフランス人によるアルジェリア認識、さらに 19 世紀後半における先住民の法的地位や植民者の自己同一性をめぐる言論と実態が分析され、当時はまだ「ネーション」の概念内容が不確定で流動的だった事実が明らかにされる。つづく第二部では、高名な東洋学者や無名の実務家によるイスラーム法学解釈の批判的検討からはじめて、植民地法体系および法解釈学の形成を論じたのち、とくに土地制度改変を目的とする諸立法とその解釈に関わる論争を分析する。その結果、たしかに植民地法は搾取を合法化する道具であるが、その前提をなす認識に対する批判的契機は、すでに同時代の人々の知的営為のなかに含まれていたことが浮き彫りにされる。そして第三部では､アルジェリア西部オラン地方の地域研究をつうじて､植民地社会の空間構成を論じる。同化主義を掲げたとされる第三共和政期に至っても、アルジェリアは地方行政制度の面でも土地法適用の面でも均質な空間を構成せず、モザイク状構造を存続させており、それが先住民と植民者双方に多重的な祖国意識または郷土意識を生みだす基盤となった、という理解が導かれる。以上の複合的な研究をつうじて、本論文は本国と植民地、ヨーロッパとアフリカという対立図式に集約される解釈を相対化し、思想・制度・空間の連続と断絶の両面を観察しながら、植民地支配と異文化接触との相互連関を論じる。

本論文は、フランスとアルジェリアの文書館で多年にわたり史料を探索・収集した成果であり、広範囲にわたる研究文献の渉猟に裏打ちされた視野の広さ、洗練された文体、批判的分析の鋭さと成熟した思索において傑出した論文として評価できる。たしかに支配・被支配の対立史観から「共有の歴史」への視座転換にはなお多くの困難が横たわり、また本論文の中に共存するイデオロギー分析または言説分析と、社会的現実の分析との論理的連関はどのように整理されるべきか、タイトルに掲げた「境域」概念はどう定義されるかなど、議論はなお明確化される余地がある。しかし未解明の部分が大きい植民地期前半の時代について、一次史料に基づいて本格的研究を実現した功績は大きく、その学問的貢献の重要性は疑う余地がないと考えられる。

以上の理由から、本論文は博士（文学）の学位を授与するにふさわしい論文であると判定する。